

貧困救うコメ 求む

フードバンク関西 不況で寄付減

関西の様々な施設に食べ物をお届けしているNPO法人「フードバンク関西」（兵庫県芦屋市）が、米不足に悩んでいる。寄付の大部分を担ってきた大手スーパーが不況のため仕入れ量を抑えているためだ。少しずつでも幅広い支援を求めている。

（西山貴章）



教会に米やパンを配るフードバンク関西の藤田治理事長（右）＝大阪市西成区、筋野健太撮影

🔑 フードバンク

消費・賞味期限が近づいたり、袋が破れて売り物にならなかつたりした食品を譲り受け、福祉施設などに無料で配る活動。1960年代に始まった米国では、現在200以

上の団体があるとされる。日本でも2000年以降、各地に設立され、フードバンク関西のほか東京、名古屋、広島、高知などに団体がある。農水省の統計によると、食べられるのに破棄される食品ロスは年間500万〜900万ト。

兵庫県尼崎市にある量販店の倉庫前。運送会社長でフードバンク関西の理事長、藤田治さん(61)はボランティアスタッフとともに、段ボールをワゴン車に次々と積み込んだ。消費・賞味期限が迫ったマフィンやドーナツ、イチゴで、店から無償提供されたものだ。藤田さんは「好意でいただいたものだから、一つも無駄にしない」と話した。

1カ月に少なくとも2回、提供主を回り、大阪府や兵庫県の施設に配る。この日は別に提供を受けた米とともに、路上生活者らを支援する教会や児童養護施設など数カ所に届けた。「炊き出しでお米の費用が一番かかるともあり、本当に助かります」と教会の関係者は話した。

食品の提供主は、京阪神などの約30社にのぼる。集まる量は年々増え、2007年が71・6ト、08年が98・8ト

で、09年は100トを超えた。しかし、そのうち米は08年に7・6トだったが、09年は5・7トに落ち込んだ。

大きな要因は、米の9割以上を提供してきた関西を地盤とするスーパーが、売り上げ減や万引きへの対策で仕入れ量を09年度に約1割減らし、売れ残る米も減ったためだ。

このため藤田さんらは昨年秋ごろ、関西に拠点を置くコメ流通業者約20社に提供を呼びかけた。だが、「コメは古くなっても米菓の原料にできるなど、いろいろな形で加工でき、余剰分はなかなか出ない」などと断られたという。

藤田さんは運送業者の社員だった1994年ごろからお年寄りの介護施設への送迎ボランティアなどをしてきた。フードバンク関西を設立したのは、芦屋市で1人で活動していた米国人らと知り合い、食の支援が必要な人がいることを実感したからだ。

「米は食事の基本。食べ盛りの子どもたちがいる施設にも十分届けたい」。当面は、米農家を中心に支援を呼びかけていくつもりだ。問い合わせはフードバンク関西(0797・34・8330)へ。